

全体討論

司会（安田裕子）

それでは、皆様からご意見やご感想をいただき、進めていきたいと思えます。ご質問がおりの方、挙手をよろしくお願ひいたします。TEM が初めての方にとっては概念が難しいかと思えますが、概念に関する質問など基本的なことをはじめ発表内容に関することまで、どのようなところからでも結構です。

質問

それぞれのご発表において、個々の分岐点（BFP）とか必須通過点（OPP）とかを取り上げて説明をされていたのですが、それがなぜ分岐点（BFP）だったり、必須通過点（OPP）になるのか、と思ひました。どういふふうに判断されたかについて、それぞれの先生方がいろいろな言い方をされていましたが、そこがクリアではない、と思われるところもありました。もう少し具体的なことを教えていただきたいと思ひます。こういう過程で出てきました、こういう考察から出てきました、ということについて教えていただければ、分析の仕方がわかるかなと思ひました。

質問

観察に基づいたところでもいいですが、支援に関する主観的なところも含めて説明していただければと思ひます。現象学的アプローチとして。研究者側の主観としてどんなポイントを捉えることに意味があるのでしょうか。

司会（安田裕子）

ご質問をありがとうございます。それでは、ご質問ならびに指定討論を踏まえて、それぞれの先生方から、お答えいただけることについてご回答いただきたいと思ひます。発表の順番で願ひいたします。それでは番田先生からよろしく願ひいたします。

番田清美

実践コミュニティの価値観の更新について。インタビューをした時点が変

わっていたんですね。在学中に就業までの話を聴いた方もありました。社会人になって過去を振り返って語ってもらった方もありました。こ指摘のとおり、いつの時点で語ってもらったのか、ものをみる視点、価値観は語りを中心に描いているので変わってくることを感じました。実践コミュニティに関する価値観は、渦中にある学生というのは、違う組織に入ることを学習と捉えている。抽出した調査対象者2の方は社会人だったので「振り返ってみると、こういうことを学んだのではないか」という学びの視点が入ってくる。実践コミュニティによってこういうことを学んだのではないか。それを一緒にして描いてしまったので、語られた時点で大学生である場合と社会人になった方を分けてみると、違うものが出てくるのではないかと思います。

なぜ分岐点（BFP）といえるのか、必須通過点（OPP）は自己探索活動なのですが、分岐点（BFP）というのは本人の課題から「これが転機となった」と自分で思えることを抽出していきました。調査者の主観は、かなり入ってくると思います。数値だけのデータだけではなく「語り」というものがどう生きてくるのか、主観を交えて分析する、ということはある程度いたしかたないことかと思えます。

和田美香

分岐点（BFP）や必須通過点（OPP）をどう判断したかについて、私が分析過程で感じながらしたことですが、語りから見出しをつけてカード化して時系列に並べたところで、「これは協力がみな体験していることなんだな」という地点を必須通過点（OPP）としました。また、体験が多様に分かれていく地点、ある人はこういう体験をして、ある人はこういう体験をしているというように、分岐している地点を分岐点（BFP）としました。体験内容を見ながらまとめていく段階で、捉えていきました。

主観についてですが、私の場合、2回目の面接で1回目の面接の内容をまとめて示しながら「こういうことでしたね」、「私はこう理解したんですが、それでよろしかったですか？」とお聞きし、さらにお話をうかがっていく形で進めて、自分の勝手な解釈が入っていないか、この理解でいいのかを確認しながら面接を行いました。また、3回目の面接はTEM図を示して、「こういう流れをどう思われますか？」と印象などをお聞きし、フィードバックしていただきながら行い、そういう意味では共同作業になるかもしれませんが、できるだけ協

力者の体験内容に近づくように努力しました。

発表させていただいた過程がどういう局面にあるのかについては、全体像の始めの時期、家族の閉塞した状況からきょうだいそれぞれの距離の置き方で、取りあえず自己コントロールできるようになる過程であると思います。しかし、ひきこもりを抱えた家族は変わらずあるわけで、いつ終わるのかもわからず、どう向き合っていくかというのが課題としてあると思います。また、この時期の体験内容には青年期の自立という側面があって、きょうだいの場合、一人で取り組んでいかざるを得ないところがあります。自立には親など環境側からの援助が必須であるとの指摘もあり、そのあたりをいかに支援していけるかが大事なかと考えております。

廣瀬眞理子

安田先生のご質問にお答えします。

まず、会話を取り戻すことが前段階にあって、そのあとにコミットメントを聞きとって実現化と一緒に動いてしておられる。まず本人との信頼関係の取戻しが関わっているのだらうと思います。

コミットメント一何かやりたいことをポツポツと本人はおっしゃるのだけれど、自分1人で実現化させることは難しい。それを前向きな言葉として気づいて親も支援するのですが、もちろんすぐうまくはいきません。辛抱強く親が待っていました。コミットメントを聴き取り、共に動くなかでその家なりの親子関係を再構築していったと言えるかも知れません。

ひきこもりの強化ということではないかもしれませんが、なかなかコミットメントが実現化できない場合は、親自身も疲れてしまっています。子どものことが心配で目が離せないというのは、「コミットメント空回りポジション」の親御さんの語りがありました。「この子は大丈夫だ」と思えない不安がございました。

フロアの方からのご質問にお答えします。

研究者が焦点づける研究テーマからまず、等至点（EFP）を決定します。等至点（EFP）までの径路をインタビューデータから見ていくなかで分岐点（BFP）を探していくということになるのかなと思います。私の研究では、会話とコミットメントをキーワードに分岐点（BFP）を捉え、分岐していく径路を類型化しました。

主観という言葉ではなくて、研究者の視点ということでおさえたいと思います。常にどういう軸足で研究するかをフィードバックする必要があると思います。ですので研究者の視点ということでご理解いただけたらと思います。

長坂晟

分岐点（BFP）や必須通過点（OPP）をどのように接合していくかについてですが、性別を変更する、しないという順番がばらばらです。日本の医療体制がなかなか進化していかない部分でもあります。現在では手術を選択する直前が分岐点（BFP）になっている状況です。

さまざまな医療を選択できるという観点からも性同一性障害の研究は、縦断的なアプローチをとっていく重要性を感じており、TEMを使って縦断的なアプローチしております。その際は本人にTEM図を見せて一緒に作り上げていく共同作業をしております。なるべく主観が入らないようなスタンスをとっています。

偽りのストーリーについて、本人の語りを通じて「どこにも帰属しているという感じが無い」ということがあったのが印象的でした。特にSex storyが組み込まれていないことです。アプローチしていくと、やっと出てきますが、それもSex storyではなくGender storyです。例えば、最近になって身体が変わり古い友人と関わりを持つとした時に初めて出てくる、「古い友人と関わりを持ちたいと思うものの、自分の生の姿が分かっちゃうから嫌だ」という思いです。このように、対人関係などのGender storyは出てきますが、自分の望む性へ移行する前のGender storyについては、組み込まれていない状態であると思います。